

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

讃美の論理と倫理 : ジョージ・ハーバートとシェイクスピア『ソネット集』

著者	西川 健誠
雑誌名	神戸外大論叢
巻	64
号	1
ページ	45-60
発行年	2014-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001630/

讃美の論理と倫理：ジョージ・ハーバートと シェイクスピア『ソネット集』^{*1}

西 川 健 誠

I

1610 年、新年の祝いとして当時ケンブリッジ大学在学一年目のジョージ・ハーバート (George Herbert, 1593-1633) は、母親に宛てて二篇のソネットを送った。これらは記録に残る最初のハーバートの詩作品とされている。そのうちの一篇にある次のような一節が私たちの目を引く。

Why are not *Sonnets* made of thee? and lays
Upon thine altar burnt?^{*2}

書かれたのが 1610 年冒頭、すなわち前年にシェイクスピアの『ソネット集』が出された直後であり、sonnets という語が読者の注意を引くべく斜字にされている。そもそも詩形自体がソネットであることから、ハーバートのこの二篇の詩が『ソネット集』への応答と取る批評家もいる。最近のシェイクスピア研究者の中では Katherine Duncan-Jones がその一人である。^{*3}

ただそのような批評家の意見で気にかかるのは、恋愛詩対宗教詩というジャンルの別に拘わり、またハーバートのこの若書きのソネット(ちなみにこの二篇はかれの詩集『寺院』[*The Temple*]には収められなかった)を額面通りに読み、ハーバートと『ソネット集』におけるシェイクスピアとの関係を対立的に捉える嫌いがある点だ。先ほど触れた Duncan-Jones は、「青年ジョージ・ハーバー

*1 本論文は 2011 年度関西シェイクスピア研究会 4 月例会(2011 年 4 月 24 日於大阪大学)での発表(「Plain Style をめぐって—ハーバートとシェイクスピア『ソネット集』」を元にしたものである。ハーバートの“Jordan (I)”及び“Jordan (II)”に関わる議論は、西川「ことば(words)と御言葉(the Word)—ジョージ・ハーバートの信仰詩における時間と永遠」(東洋女子短期大学・東洋学園大学ことばを考える会編『ことばのスペクトル—時間』[リーベル出版、1998]、一六五〜一九四頁；英訳は“Words and the Word: Time and Eternity in George Herbert's Religious Lyrics” (東洋学園大学紀要第 6 号、pp.103-117)) と一部重複する。

*2 ハーバートの詩作品からの引用は、John Tobin (ed.), *George Herbert: The Complete English Poems* (1991. Reprinted with a new introduction and corrections. Harmondsworth: Penguin, 1994) による。

*3 Katherine Duncan-Jones (ed.), *Shakespeare's Sonnets* (Arden 3rd series. London: Thomas Nelson, 1997), pp.70-71. 劇作品も含めより広くシェイクスピア作品とハーバートの詩のイメージリーを論じたものとして、村岡勇「シェイクスピアとジョージ・ハーバート」(十七世紀英文学会編『形而上詩研究』[金星堂、1976]、一三九—一七四頁)がある。

トは、当代筆頭の劇作家が、半ば同性愛に、半ばシニカルな異性愛に没入した、そして事実上全く精神的ではない、詩集の著者と名乗ったことに、ショックを受けたかもしれない^{*4}と記している。

しかし、ハーバートの他の詩篇、また『ソネット集』の中でも自らの詩作について言及しているメタポエトリ的な詩篇を読むと、違う意見もあり得ると思う。かたやキリスト、かたや美青年という違いこそあれ、ハーバートの詩も、『ソネット集』の(126番までのという限定がつくが)詩も、「讃美」の詩である。自らにとって真実理想的な存在を称える時に、讃美の言葉も嘘のない、真実な言葉であるべきではないか。が、理想の存在を前にして自分のことはそれを正しく伝え得るものか。そもそも自分の記す詩の言葉——言葉の綾を含む詩の言葉——は倫理的に可能なものなのか。John Kerrigan の言う通り、シェイクスピアが「自らの芸術の倫理的意味合いについての敏感さから比喩についての究明を自らの芸術の中で行った」と評価される詩人であり、またハーバートも James Boyd White の言葉を借りれば「言葉を口にすることは罪、それも根源的な意味で罪だ、なぜなら、そうすることはイコール神の意志に逆らって人の意志を主張することだから、という感覚から出発して詩を書く」詩人であるならば、讃美の言葉、もつといえは詩の言葉一般の倫理性についての根本的な拘りを、双方とも有していたと思われる。

愛の対象への相応しい讃美の仕方、特に「虚飾のない」plain な讃美の仕方について、どう考えどんな実践を行っているのだろうか。「讃美の論理、倫理」という角度から、ハーバートの作品とシェイクスピア『ソネット集』中の作品を並べて読んだ際、共通して見えてくるものは何か、この小論で考えてみたい。

II

まずはシェイクスピアのソネット 21 番を取り上げる。恋愛における真心(truth)と表現における真実(truth)の不可分性を主張する詩群が『ソネット集』にはあるが、その第一のものがこれだ。

So is it not with me as that Muse,
Stirred by a painted beauty to his verse,
Who heaven itself for ornament doth use,

*4 Duncan-Jones, p.70.

*5 John Kerrigan(ed.), *The Sonnets and A Lover's Complaint* (Harmondsworth: Penguin Books, 1986), p.29. なお本論文中の『ソネット集』からの引用は Kerrigan の版に従う。

*6 James Boyd White, *"This Book of Starrs": Learning to Read George Herbert* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1995), p.29.

And every fair with his fair doth rehearse,
 Making a couplement of proud compare
 With sun and moon, with earth and sea's rich gems:
 With April's first-born flowers, and all things rare
 That heaven's air in this huge rondure hems.
 O, let me, true in love, but truly write,
 And then, believe me, my love is as fair
 As any mother's child, though not so bright
 As those gold candles fixed in heaven's air:
 Let them say more that like of hearsay well;
 I will not praise that purpose not to sell.

9行目“O, let me, true in love, but truly write”が全体の要約であろう。自分は虚飾の美(“painted beauty”[1.2])に動かされて真実を曲げる大袈裟な比喩に走る詩人とは違う、本物の美の持ち主を真心から愛する自分は、真実を曲げるような言葉は使わないで詩を書く、というわけだ。true in loveの直後にtru[ly] writeと、trueという語が繰り返されるように配置されることで、愛における真実さと、言葉の真実さが結びつけられている。

「他の詩人とは違う。自分は…」と語る語り手は、その差異を実際に示してもみせる。10行目後半から12行目。恋人といえどもこの地上に生きる存在なのに、他の詩人は天上のものまで比喩の vehicle に用いる、だから太陽や月まで持ち出されるけれども、私はそういうことはしない、だから私の愛する存在は美しいといっても「母から生まれるいかなる子供に劣らぬ程度に」(“as fair as any mother's child”[1.11])美しいのであり、輝かしいといえども「天球に固定された黄金のろうそく[のとき星々]のようには、輝かしくない」(“not so bright / As those gold candles fixed in heaven's air”[1.12])、としか記さない、と言う。前者は「比較」ではあっても「比喩」とはいえない表現を用いることで、後者は比喩の前に打ち消しの not を置くことで、語り手は true な言葉遣いを実践しようとしてみせている(諸注釈者の指摘する通り「星のようではない」というのは、シドニーの *Astrophil and Stella* を意識した表現だろう^{*7})。武骨な程に綾を排した plain な表現をすることで「奢った比喩」(“proud compare”[1.5])に替わる表現を提示しているわけである。

“It is not so with me as that Muse”, “O let me...”, “Let them...I will not...”と、

*7 例えば Duncan-Jones, p.152, n12. ハーバートもまたシドニーを意識していることは本論文Ⅲ節、およびⅣ節*15を参照。

them 対 I の対立に虚飾(paint[ed])と真実(truth)という対立(さらに 13 行目の hearsay に注目すれば、「伝聞＝借り物の言葉」と自分オリジナルの言葉、との対立も、だろうか)を重ねる、そして them の用いる既成の比喩を揶揄する一方で自分のオリジナルな、脱・比喩的言葉の用い方を示しているのがこのソネットの構造だ。愛・言葉双方における truthfulness の拘わりは、語り手の倫理性を示すが、他方どこか無理・力みもあるように感じられる。他の詩人は月星や太陽を比喩に用いる、「自分の愛する人の美しさを語るのに美しいものごととくを引き合いに出す」(“[that Muse] doth rehearse every fair with his fair”)と難ずる語り手ではあるけれども、同じ語り手は三つ前のソネット、ソネット 18 番で、自分の愛する青年が太陽よりも穏やかで翳りがないと語り(“Sometime too hot the eye of heaven shines, / And often is his gold complexion dimmed”[18, ll. 5-6])、「美しいものはどんなものも美しさから転落する(が、青年は美しさを失わない)」(“[E]very fair from fair sometime declines”[18, l. 7])と記し、自然界の美しきものに喩える、いや自然界の美しきものよりなお美しい、という形の誇張表現を用いていた。^{*8}こうなると、言葉の大袈裟さへの批判は、語り手自身が書いた言葉にも向かわざるを得ない。

「真実さ」(その真実さが ornament の拒否にあるとすれば「平明さ」と言い換えてよかろう)を武器に他の詩人を斬り自らの詩作の有り様を弁護する態度と、その態度につきまとう精神の強張りとは、このソネットを特徴づけていよう。が、自分の詩と他の恋愛詩という対立を宗教詩と恋愛詩という対立に置き換えれば、それは次に見るハーバートの「ヨルダン川(I)」(“Jordan(I)”)の特徴に、そのまま重なる。

III

『ソネット集』に詩作そのものについての詩群があるのと同様に、ハーバートの『寺院』にも詩作そのものを扱った詩が少なくない。これから取り上げる「ヨルダン川(I)」もその一つだ[(I)とあることからわかるように、間にかかなりの作品を挟んでではあるが「ヨルダン川(II)」との連作である]。ヨルダン川とはイスラエルの民が約束の地に入る前に渡った川であり、かつ旧約聖書においてはハンセン病者のナウマンがそこで身を洗って癒された場所(列王記後書 5 章 10 節)、新約聖書においてはイエスが公生活に入る前にヨハネから洗礼を受けた場所(マタイ伝 3 章 14 節)場所でもあることから、この題名には宗教詩人として自らの詩に洗礼を施す意図が感じられる。

*8 Anne Ferry, *The Inward Language: Sonnets of Wyatt, Sidney, Shakespeare, Donne* (University of Chicago Press, 1983), pp.176-7.

Who says that fictions only and false hair
 Become a verse? Is there in truth no beauty?
 Is all good structure in a winding stair?
 May no lines pass, except they do their duty
 Not to a true, but painted chair?

Is it no verse, except enchanted groves
 And sudden arbors shadow coarse-spun lines?
 Must purling streams refresh a lover's loves?
 Must all be veiled, while he that reads, divines,
 Catching the sense at two removes?

Shepherds are honest people; let them sing:
 Riddle who list, for me, and pull for Prime:
 I envy no man's nightingale or spring:
 Nor let them punish me with loss of rhyme,
 Who plainly say, *My God, My King*.

ソネット 21 番で登場していた「真実」(true/truth) 対「虚飾」(paint[ed]) の対立が、この詩においても第一連から登場する。真実の中には美がないのか、本物ではなく虚飾で飾った王座——“painted chair”[1.5] は化粧をした女性が座っている椅子とも解せる——に礼をつくさない限り詩行として通用しないのか、と憤慨しながら語り手は問うのだ。真実に美しい美青年を称える自分対虚飾の美しか持たない愛人を称える他の詩人、という対立軸が、宗教詩か世俗詩かという問題に転位されているといえよう。前者の特徴として「平明」(“plain[ly]” [1.15]) であることが帰せられ、対するに後者は「屈曲」(“winding”[1.3])、
 「隠蔽」(“veiled”[1.9]) を伴うもの、とされている。世俗の詩人に「私」から韻文を奪わせてなるものか、と宗教詩人としての意気込みを示した所で詩は結ばれている。

これもソネット 21 番と共通の特徴だが、この詩の語り手は「他の者は...するがよい(“let them...”)、私(“I”)は...する」という詩の組み立てを具体化するかのように、対抗する詩人の言葉遣いをパロディする一方で自分の詩の書き方も披歴している。第二連の「魔法にかかった木立」(“enchanted groves”[1.6])、
 「突然現れる木陰」(“sudden arbors”[1.7])、
 「サラサラ流れる小川」(“purling streams”[1.8]) といった語句は、牧歌的ロマンス——例えばシドニーの *Arcadia*

——の常套的セッティングを揶揄した表現であろう。第三連の“pull for prime”[l.12]はトランプの用語で「一等の札を取る」の意だが、*OED* でこの句を引くと初例としてダンの *Satire II* からの用例があがっている (“He...spends as much time Wringing each Acre, as men pulling prime”[*OED*, pull v, 3])。直前に「謎をかけたい者には私にかわってかけるがよい」(“Riddle who list for me”[l.14])とあることを考えれば、ダンの表現の晦渋さを揶揄したものと取れよう。対するにこの詩人はどうするか、といえは「わが神、わが王」(*My God, My King*)という詩篇(詩篇 5, 68, 84, 145)に起源を有する句を用いよう、というのだ。「平明に」(“plainly”[l.15])という語に、「虚飾の」(“painted”)とかれが見る世俗の詩人への対抗意識が感じられよう。さらに「歌う」(*sing*)のではなく「唱える」(“say”[l.15])と決意表明している所に、さらなる反美的な美意識、*anti-poetic* な *poetics* も見てとれそうだ。

I 対 *them* の対立に真実(*truth*)と虚飾(*fiction*)という対立軸を重ねる、そして *them* の詩学を揶揄する一方で自分の詩学を示している点で、「ヨルダン川(I)」はソネット 21 とは通底する。またソネット 21 におけるのと同様、「ヨルダン川」においても *truthfulness* の拘わりは、語り手の倫理性を示す一方で、他方でどこか力みを感じさせる。これが最も顕著に現れるのは結びの二行であろう。『わが神、わが王』と平明に唱える」と語る時の語り口は、「平明」から想像される柔和さとは裏腹にいささか得意げである。この箇所について「同じ一人の詩人が、謙遜さと私的な勝利の両方を手にしている」と Stanley Fish は評しているが、^{*9}「わが神、わが王」と唱える信仰者としての謙遜と表裏一体になっているプライドを言い当てた、適切な評といえるだろう。しかも「韻＝詩を手放させるという罰をかれらが私に加えることを許しはしない」(“no[t] let them punish me with loss of rhyme”[l.14])と、韻文の書けなくなる可能性を云々しておきながら、詩の末尾の単語の *King* は綺麗に二行前の *spring* と押韻している。ソネット 21 における語り手が「どの人の母の子にも劣らぬ」「輝しくとも空の星ほどではない」と語る際に聞こえてしまうのと同種の意固地さが、ここでも聞こえてしまう。

ハーバートに対してさらに厳しいことをいえば、この詩に関する限り、自らのことばへの懐疑、自らの詩の虚構性への自覚に欠けていると言わざるを得ない。シェイクスピアは特別に信仰を標榜する詩人ではなかった。とはいえ『ソネット集』の語り手は、美青年を詩の形で永遠のものとしようという強い意志を披歴する一方、自らの言葉がその任にふさわしいかの懐疑も表明している。例えば 103 番では

*9 Stanley Fish, *Self-Consuming Artifacts* (Berkeley: University of California Press, 1972), p.196.

Were it not sinful then, striving to mend,
To mar the subject that before was well? [103, ll.9-10]

と、美青年の真価に自分の筆で手を加えることはかえってその真価を損なって伝える一種の罪ではないか、と自問し、83 番では

For I impair not beauty, being mute,
When others would give life, and bring a tomb [83, ll.11-12]

と、他の詩人のように美青年の美を生き活きと描こうとしてかえって生気のない描き方に終わることを避けるべく、自分は沈黙を守ることによって美を損なわずにいるのだ、と語っている。つまり、完璧な美しさと思われるものを前に言葉は無力なのではないかという感覚が示されているのだ。この感覚を宗教詩人にも期待するのはおかしくなからう。いや、讃美の対象たるキリストの超越性を意識し、なおかつ想像力を含めた原罪による人間の墮落を強く意識しているなら、いっそうのこと自らのことばの有限性、汚れの感覚は求められるはずである。が、キリストを称えるという義務感の強さが災いして、ハーバートの詩の語り手はこの感覚を失っているように見える。世俗の恋愛詩の倫理性を問うのに汲々として、詩一般、宗教詩まで含めた詩の倫理性についての考察が欠けているということである。自分が世俗詩に抗して書くという宗教詩も「詩」= poem=that which is being made である以上は、「作りもの」すなわち fiction としての性格を免れない、という問いがあってもよくはないか。「宮の外」のことを語る profane な詩人が抗し、自ら「宮」(*The Temple*)と題した詩集をものすこの詩人は、「宮の内」の詩人が陥りがちないわば「聖者の傲慢」に陥っていないか。

この「聖者の傲慢」に、しかし、ハーバートは気付いていた。「ヨルダン川(Ⅰ)」の後編にあたる「ヨルダン川(Ⅱ)」で取り扱われる。

IV

When first my lines of heav'nly joys made mention,
Such was their luster, they did so excel,
That I sought out quaint words, and trim invention;
My thoughts began to burnish, sprout, and swell,
Curling with metaphors a plain intention,

Decking the sense, as if it were to sell.

Thousands of notions in my brain did run,
 Off'ring their service, if I were not sped:
 I often blotted out what I had begun;
 This was not quick enough, and that was dead.
 Nothing could seem too rich to clothe the sun,
 Much less those joys which trample on his head.

As flames do work and wind, when they ascend,
 So did I weave myself into the sense.
 But while I bustled, I might hear a friend
 Whisper, *How wide is all this long pretence!*
There is in love a sweetness ready penned:
Copy out only that, and save expense.

“Jordan(I)”では他詩人に向けられていた批判が、この詩では回想の形で自らに向けられる。第一連。地上の物事ではなく天上の物事を語る宗教詩人としての意気込みにかられて気の利いた言葉や巧妙なアイディア(“quaint words and trim invention”[1.3])を求めた。しかしそのために「平明な意図に比喻という名のカールをかける」(“curling with metaphors a plain intention”[1.5])という平明さからの逸脱がおきてしまった。この連最後の行の“decking the sense, as if it were to sell”[1.6]は、最初に見たソネット 21 の結びの裏返し of the 表現と読めよう。ソネットの語り手は「(愛する者を)売りものにするつもりがない私は、(過剰に)賛美はしない」(“I will not praise that purpose not to sell”)いたのに対し、ハーバートのこの詩の語り手は「意味を飾り立て、さながら売りもののようにしてしまった」というわけだ。

続けて第二連では名句をひねり出そうと汲々としていた様が振り返られている。「この句は生きがよくない、あの句は死んでいる」云々。意味が取り難い、しかし重要な曖昧さが含まれているのが同連の結びの2行である。直訳すれば「天にある太陽の輝きを包み伝えるのならどんな立派な言葉でも立派過ぎには思えず、その上にあって太陽を下にする喜びを伝えるとなればなおのことそうであった」とでもなる。が、太陽を意味する the sun は神の御子をあらわす the

*10 村岡氏はこの箇所をソネット 21 の他、*Love's Labor Lost*(II, i, 15; IV, iii, 239)と結びつけハーバートによるシェイクスピアの意図的借用と見る。村岡、一六四頁

Son と音が通じることを思い出すなら、the Son を下にする喜びとは御子を踏みつける喜びである。これは一体何か、そもそも御子を言葉で「包む」ことはその輝きを「暗く」する冒涇の行為ではないか、という問いが生じて来るだろう。語り手が本当に称えようとしていたものが神なのかそうでないのかの混乱が、この曖昧さから伝えられる。実は似たような曖昧さが第一連目にもあった。二行目の *their luster* の *their* は、一義的には “*heav’nly joys*” [l.1] を指すと考えられるとはいへ “*my lines*” [l.1] とも解せる。^{*11} とすれば、詩人を動かしていたのは宗教的な喜びか自分の書く詩行の輝かしさか曖昧なことになる。信仰心が詩を書く動機だったか、書くこと自体の喜びが動機だったか、不明確だった、というわけだ。

この状態を圧縮して表現したのが第三連の「自我を意味の中に折り込んだ」 (“*weave myself into the sense*” [l.14]) という表現である。が、そこで救い舟が差し出される。第三連の結び 4 行を見直したい。

But while I bustled, I might hear a friend
Whisper, *How wide is all this long pretence!*
There is in love a sweetness ready penned:
Copy out only that, and save expense.

洒落た語句を見つけようとして袋小路に陥っていた所に、「友」の声がして、「そんな長々と的外れな言葉を書いているならば、すでにある愛の言葉を記して、創作の手間を省きなさい」と忠告される。この「友」が誰か問題になるが、一般的にはキリストと解される（「友はハーバートの詩中においてはキリストを指すコードワード」という Fish の評があるが、^{*12}ここは重要な点なので後でもう一度触れる）。心理的には、宗教詩人としての自負過剰・自家中毒状態に陥って語り手を、キリストが「友」として忠告することにより救いだしていると解釈出来る箇所だ。と同時に、メタポエトリー的に見れば、この詩の結びの 2 行半の執筆が語り手から友たるキリストに委譲され、語り手が 2 行半分「友」の忠告通り創作力の「節約をして」 (“*save expense*”) いるとも解せる。*physical* なレベルで見るとキリストが語っているのではなくキリストが語ったように詩人が演出してみせている所だが、他方 *metaphysical* なレベルで見ると

*11 この *their* の曖昧さの指摘は Wilcox による。Helen Wilcox, “George Herbert” in Thomas N. Corns (ed.), *The Cambridge Guide to English Poetry: Donne to Marvell* (Cambridge University Press, 1993), p.193.

*12 Fish, p.198. *14 も参照。

ら、創作の功績を自分からキリストに委譲するセレモニーを詩の中でしているとも解せるのである。聖餐式において人間の労働の成果として奉納されたパンとブドウ酒に司祭がキリストの体と血とを現存させるのと同様、この司祭詩人は自らの詩行と詩行との著作権をキリストに奉獻することで、キリストを自らの詩行に現存させている、と言えるかもしれない。

宗教詩人としてハーバートにはキリストが自らの創作のテーマのみならず創作の源泉であり、自分の書いた詩は自らのインスピレーションの源たるキリストに奉獻されるべきもの、という感覚がある。この感覚を生かして、キリストを自分の詩のいわば究極の執筆者として演出しているのが“Jordan (II)”と読めるだろう。いくら平明に詩を書こうとしても自我が侵入してきて言葉を曲げてしまう危険がある以上、愛する存在その方を登場させて語らしめる、という手法を取っているともいえる。

しかしこの「奉獻」の感覚・手法は宗教詩人に独特のものではないはずである。恋愛詩人においても、愛の対象を詩の靈感の源泉と仰ぎ、この靈感の源泉に詩は捧げられるべきものだという自覚はあり得よう。この観点から『ソネット集』に戻ってみると、38 番においては、

[T]hou dost breathe that pour'st into my verse
Thine own sweet argument [38, ll.2-3]

と、美青年が美青年じたいという主題を提供してくれる、つまり美青年が主題であると同時に、「息吹」(“breath[e]”[1.2])＝インスピレーションを吹きこんでくれる存在である、とあり、数行後には、

O, give thyself the thanks, if aught in me
Worthy perusal stand against thy sight;
For who's so dumb that cannot write to thee
When thou thyself dost give invention light? [38, ll.5-8]

とあり、多少なりとも「君」のお眼鏡にかなう句があるとしたら、その句を生む独創力(“invention”[1.8])を与えたのは他ならぬ「君」なのだ、だから詩人ではなく自分に感謝するがよい、という考え方を示している。あるいは 79 番を見ると語り手は

[W]hat of thee thy poet doth invent,

He robs thee of, and pays it thee again. [79, ll.7-8]

と述べ、詩人が独創(“invent[ion]”[l.7])だと思って記した言葉は、もともと美青年の内にあるものを指すための言葉なのだから、独創ではなく美青年から「盗んだ」(“robs”[l.8])ものであり詩にして「返済」(“pays...again”[l.8])しているに過ぎない、と主張している(横道にそれるが、今引用した二つの箇所、*invent/invention* という単語が出てきている点も目を引こう。「独創」が第一義だろうが「発見」とも訳し得る語である。詩人としては自分の「独創」として詩を書いているつもりだろうが、実はモデルの中にある美しさを「発見」しているのみに過ぎない、という感覚がこの両義性から伝わろう。先ほど読んだハーバートの“*Jordan (II)*”に登場していた「(すでに書かれている麗しさを)写しなさい(copy)」という考え方と響きあう言葉づかいだ。)

さて、詩が書けるのは君のおかげ、君の眼鏡にかなう句が見つければ感謝は君にこそ捧げられるべき、という発想をさらに進めて、“*Jordan (II)*”のように、愛する対象の美青年を詩の共同執筆者として演出する、すなわち美青年の声が詩中に導入されているソネットはあるだろうか。私の見る所、32番がその条件を満たしていると思う。

If thou survive my well-contented day,
 When that churl Death my bones with dust shall cover,
 And shalt by fortune once more resurvey
 These poor rude lines of thy deceased lover;
 Compare them with the bettering of the time,
 And though they be outstripped by every pen,
 Reserve them for my love, not for their rhyme,
 Exceeded by the height of happier men.
 O, then vouchsafe me but this loving thought:
 ‘Had my friend’s Muse grown with this growing age,
 A dearer birth than this his love had brought
 To march in ranks of better equipage;
 But since he died, and poets better prove,
 Theirs for their style I’ll read, his for his love.’

詩人である語り手が、自らの亡くなった後に愛する美青年が自分の詩を読みなおすことを希望して語っている。文芸進歩の時代にあって他の詩人が優れた詩

を書く中、私の詩は後塵を排さざるをえない。が、愛する君に対する真心という点では負けないから、「技法を求めてなら他の詩人を、愛情を求めてならあいつの詩を読もう」という思いを私にかけてくれ、というわけである。こうして未来に自分の詩を運よく再読している美青年の言葉という形で、美青年の言葉が詩の中に取り込まれている。しかも、Vendler が指摘している通り、語り手が再登場することなく美青年の言葉で詩が結ばれている。これによって、話が現実に戻されるかわりに、希望されている美青年の言葉の降臨が「今、ここ」で起こっている印象が生まれていよう。過去に下った言葉が回想される形であるか、未来に下されるのを希望する言葉を先取りする形であるかの違いはあれ、愛する対象の言葉が詩の中に取り込まれている——再び神学的な語彙を用いれば現存(made present)されている——のだ。この点で“Jordan (II)”とこのソネットとは共通の構造を持っている。いずれも詩行の一部を語り手の言葉ではなく愛する対象の言葉とすることにより、その愛する対象の人物——“Jordan (II)”の場合はキリスト、このソネットの場合は美青年——が詩の共同執筆者であることが暗示されているのだ。さらに、先ほど触れた通り、語り手が美青年を自らの詩のインスピレーションの源と見ていることも考えると、このソネットは、自らの詩の言葉の究極的な源泉である美青年に、詩作の功績を返納している実例とも解せよう。“Jordan (II)”における外部の声の導入が、語り手のキリストに対する詩人としての自我奉獻のセレモニーになっているのと同様、このソネットでも語り手が美青年をして語らしめることで、自らの詩人としての技量上の至らなさがかれに献納されている実証に、また同時に誰が語り手に靈感を与えているかを暗示する実証に、なっているのである。

ところでこのソネットと“Jordan (II)”との間にはもう一つ共通点がある。それは語り手とその愛の対象との関係が「友人同士」の関係として捉えられている点だ。確かにこのソネットでは愛の対象が語り手のことを指して friend と言っているのに対し、“Jordan (II)”においては語り手の方が愛の対象を指して friend と言っている違いはある。しかしシェイクスピアの他のソネットにおいては

To me fair friend, you never can be old,
For as you were when first you eye I eyed,
Such seems your beauty still[.] [104, ll.1-3]

*13 Helen Vendler, *The Art of Shakespeare's Sonnets* (Cambridge, MA. Harvard University Press-Belknap, 1997), p.174.

と、変わらぬ美を有する存在としての美青年への呼びかけに friend という語が用いられ、また

[I]f the while I think on thee, dear friend,
All losses are restored and sorrows end. [30, ll.13-14]

と、失意のどん底から語り手を引き上げてくる存在としての美青年に friend と呼びかけるなど、語り手の方から愛の対象たる美青年を指して friend と呼んでいる例がある。そして先ほど触れたように、ハーバートの詩の語り手も詩中でキリストを指して friend と呼ぶことが度々だ。^{*14}この双方の点を考えると、シェイクスピア、ハーバートとも理想の愛を「友愛」と捉える詩人であり、両者とも愛の対象の声を導入するにあたりそれを「友」の声として導入している、といえそうである。

こう考えた際、“Jordan (II)”の末尾について、これまでのハーバート批評における見解以外の見解をつけ加えることが出来ないだろうか。このような外部の声の導入にあたりハーバートの先例としてあげられてきたのは、シドニー『アストロフィルとステラ』冒頭のソネット末尾であった。ステラを称える言葉が見つからず四苦八苦していると「愚か者、自分の心の中を覗いて書きなさい」と語る詩神の声があった(“‘Fool,’ said my Muse to me, ‘look in thy heart and write.’”)という部分である(この解釈を補強するために、「写す」(copy)という語に注目し、「ステラの顔の中に愛と美の本質を読み取るので、私のすべきことは「自然」が彼女の内に記したことを写すのみだ」という、同3番の結びとの繋がりが指摘されることもある[“...in Stella’s face I read / What love and beauty be; then all my deed / But copying is, what in her Nature writes”]^{*15})。それはそれで妥当な指摘ではあるが、両方の詩人が愛の対象をしばしば「友」と呼び、両方の詩で「友」という言葉が出てきていて、さらにその友情関係にある愛の対象の声が導入されていることに注目するならば、シェイクスピアのソ

*14 *12を参照。また Vendler は *Invisible Listeners: Lyric Intimacy in Herbert, Whitman, and Ashbury* (Princeton University Press, 2005) の中でハーバートについて一章(pp.9-30)を割いて、「伝統的には「垂直的」であった神への呼びかけを親しい友への呼びかけとすることで水平化している」(p.9)ことに、詩人の驚くべき達成があったとする。

*15 *Astrophil and Stella* 第1歌とのエコーを指摘する批評家は、F.E. Hutchinson (in *The Works of George Herbert*[Oxford University Press, 1941], p.513)、Louis L. Martz (in *The Poetry of Meditation*[1954. Revised edition. New Haven: Yale University Press, 1962], p.261, n.4)、Helen Wilcox (in *The Complete English Poems* [Cambridge University Press, 2007], pp.370-1.)等。うち Martz と Wilcox は第3歌とのエコーも指摘している。なお Sidney からの引用は Catherine Bates (ed.), *Selected Poems of Sir Philip Sidney* (Harmondsworth: Penguin, 2004)による。

ネット 32 番もハーバートの“Jordan(II)”の先例と呼べないであろうか。『アストロフィルとステラ』第一番の末尾の言葉も、“Jordan(II)” 末尾の言葉も、いわば「天から」下る助言の言葉ではあるが、ハーバートはこの「天から」の言葉の垂直的・上意下達的ニュアンスを、多少なりとも和らげたかったのであろう。その際に友が詩人のことを友と認めて語りかけるシェイクスピアのソネット 32 番はハーバートにとり「使える」ものと考えたことはあり得ると思われるのである。語り手の「愛」を「認める」、love を approve するソネット中の「友」の慕わしさに、詩を書く語り手に助言を与えるキリストの愛情と同種のもを感じた、だからこそキリストを the Son とも the Lord とも my heavenly Muse とも呼ばず “a friend” と表現したのではないか。人の心を救うのみならず、詩の作り手 a maker たる語り手が想像力の袋小路に陥った際に同志的な援助を与えてくれるのが the Maker たるキリストである、そこに信仰者のみならず作家でもあるハーバートとキリストの間ならではの関係がある、とするのならば、キリストを指し a friend という語を選んだ詩人の語の選択はまことに適切ではないか。そしてこの選択の背後には、シェイクスピアのこのソネットがあるように思われるのである。

V

愛する対象が人か、キリストであるかを問わず、その対象に真正の美を見出すのであれば、対象を称える詩人にとり、その美しさを自らの筆で損ねることなく真正に伝えることが課題になろう。この課題をハーバートも『ソネット集』におけるシェイクスピアも共有している。そこから両詩人に共通の第一の特徴として、綾のない平明＝plain な表現法での志向が生まれる。他の詩人は虚飾に走るが、自分は平明に書く、という宣言を両詩人ともにしているが、その宣言にいささか過剰な自負心が伴っている点も両詩人に共通である。次に、平明さへの志向を突き詰める中、第二の共通点として、両詩人とも自らの筆がかえって描こうとする美しさを損ねるのではないか、という懷疑を抱いている。『ソネット集』の場合、美青年の美しさの前に沈黙する他ないのではないかという思いが表明されており、ハーバートの場合、キリストを称える熱心さの中にも自らの詩人としてエゴが侵入している、という省察に至っている。

愛する対象を称えたい、しかし相応しく称え得ない——これは世俗詩であれ、宗教詩であれ、讃美の詩についてまわるジレンマといえよう。このジレンマを両詩人はどう解決しただろうか。ハーバートは、詩の中にキリストの声を導入することで、ペンで書きつけるのは自らであるにしても言葉を発する主をキリストのものとする演出をしてみせた。キリストが語る分だけキリストが詩

の共同執筆者になる、いわば著作権の部分的委譲のセレモニーを、詩の中で行ってみせたわけである。これと似た例が『ソネット集』にないかどうか探すと、美青年が語り手の死後語り手の詩を読んで、それを認める言葉を埋め込んだソネットがある。こちらも美青年が語っている行数分だけ、美青年が詩の共同執筆者となり、部分的に詩の著作権が美青年に委譲されていることになる。こうして自分の詩のインスピレーションの源たる愛の対象の声を詩に導入することで、その愛の対象を自らの詩の究極的な執筆者として演出してみせている——自らという小文字の author の向こうに、愛する対象が the Author として控えていることを示している——点が、両詩人の第三の共通点といえる。そして興味深いことに、どちらの詩人も自分と the Author の関係を「友愛」= friendship の関係で捉えてもいる。

片やはっきりとした宗教詩人、片や特別の信仰を標榜はしない詩人であり、一緒に論じられることは少ないハーバートとシェイクスピアではある。が、讃美のあり様という点で並べてみると、共通点の少なくないことがわかった。シェイクスピアのソネット 82 番に、“Thou, truly fair, wert truly sympathized / In true plain words by thy true-telling friend”[ll. 11-12] という言葉があるが、「真に美しいもの」を「真実を語る友」の間柄として「真実で平明な語で」「真実に描く」ことは、ハーバートにも共通の課題であったからだ。「平明に友を賛美するための詩学」を突きつめて考えていた点で、シェイクスピアとハーバートは存外近い立ち位置にいたのではないか。

引用文献

- Bates, Catherine (ed.). *Selected Poems of Sir Philip Sidney*. Harmondsworth: Penguin, 2004.
- Duncan-Jones, Katherine (ed.). *Shakespeare's Sonnets*. Arden 3rd series. London: Thomas Nelson, 1997.
- Ferry, Anne. *The Inward Language: Sonnets of Wyatt, Sidney, Shakespeare, Donne*. University of Chicago Press, 1983.
- Fish, Stanley. *Self-Consuming Artifacts: The Experience of Seventeenth Century Literature*. Berkeley: University of California Press, 1972.
- Hutchinson, F. E. (ed.). *The Works of George Herbert*. Oxford University Press,

*16 両作家を並べて論じた数少ない論者である前述の村岡氏は、ハーバートの功績を世俗詩の表現を聖化することの内に見、元の材源を与えた詩の中にシェイクスピアを見ておられる(村岡一七一一七二頁)。この点私も異存はないが、私としてはより積極的に、両者の内に見られる、「友」を語るにあたっての平明さへの志向を強調したい。

1941.

Kerrigan, John (ed.). *The Sonnets and A Lover's Complaints*. Harmondsworth; Penguin, 1986.

Martz, Louis. *The Poetry of Meditation*. 1954. Revised edition. New Haven: Yale University Press, 1962.

Tobin, John (ed.). *George Herbert: The Complete English Poems*. 1991. Reprinted with a new introduction and corrections Harmondsworth: Penguin 2004.

Vendler, Helen. *The Art of Shakespeare's Sonnets*. Cambridge, MA: Harvard University Press-Belknap, 1997.

——— *Invisible Listeners: Lyric Intimacy in Herbert, Whitman, and Ashbury*. Princeton University Press, 2005.

White, James Boyd. *"This Book of Starrs": Learning to Read George Herbert*. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1995.

Wilcox, Helen. "George Herbert" in Corns, Thomas (ed.), *The Cambridge Companion to English Poetry*. Cambridge University Press, 1993.

——— (ed.). *The Complete English Poems of George Herbert* (Cambridge University Press, 2007).

村岡勇「ジョージ・ハーバートとシェイクスピア」。十七世紀英文学会編『形而上詩研究』(金星堂、1976)、一三九—一七四頁。